

遠隔教育と対面教育との連携——本居宣長にみる教育と研究——

白 石 克 己

はじめに

本居宣長（享保一五年・一七三〇—享和元年・一八〇一）は『玉勝間』で名古屋の田中道麿をこう評す。「此道まるといひしは（中略）またなくふることを好み、人にも教へて、ことに万葉集を深く考へ得たる人になむ有ける、年はや、このかみなりしかども、宣長が弟子になりて、二たび三たびはこゝにも来、つねはしばゝふみかよはしてなむ有ける」（全一・四九）。

たしかに道麿はすでに門人を三百人も持ち宣長より六つ年上ながら、松坂を表敬訪問している。安永六年（一七七七）のことである。この後、道麿は「つねはしばゝふみかよはし」とあるとおり、書簡上で宣長と質疑応答を交わしている。その成果は『答問録』（全一・二）、『万葉問聞抄』（全一・六）、『万葉集問

答』（全一・六及び一四）、『田中道麿後撰集疑問』（全一・別二）など多数、残されている。道麿は『万葉集』などに関する疑問を書簡に予め余白を設け、所見を加えた疑問や質問を送る。宣長はこの疑問や質問への回答や自分の所見を詳細に書き入れ返信している。初期の質疑応答の時期、二人は師弟の契りは交わしていない。正式入門は最初の訪問の三年後、安永九年である。宣長はこの道麿に限らず、入門していない学習者にも書簡で熱心に指導している。

私はこうした宣長の遠隔教育やその理論について研究してきた⁽²⁾。その特徴を一言でいえば、実際の活動の面でも理論的な面でもきわめて開放的な教育であった。五百名以上もの門人を対象にしながら門人の出身地域は全国各地に散っており、社会的階層も性別も年齢層も多彩であった。「遠隔教育」distance

educationの呼称のとおり、地域も身分も性も年齢にも「へだたり」があるにもかかわらず、書簡などの独特の「やりとり」によって門人同士の「つながり」を確保していた。

したがって、わが国の遠隔教育の起源についても、通説の明治期の講義録説とは異なり、少なくとも本居宣長と門人たちとの書簡の交流にまで遡ることできることを明らかにした。のみならず、その教育活動は一方向の通信教授ではなく、相互交流のある遠隔教育にふさわしい活動であったことを指摘した。賀茂真淵との師弟関係も宣長自身、「一度のみなりき」（全一・八七『玉勝間』）と書いているように、「松坂の一夜」の対面教育は過大評価である。宣長はあしかけ七年にわたって書簡上での質疑応答によって真淵の指導を受けた。その過程は『万葉集問目』（全一六）でわかる。真淵の書き入れがある『仮名古事記』なども借覧し、遠隔学習を続けた。

しかし宣長が対面教育を実施したのも事実である。冒頭の引用のごとく、道麿は「二たび三たびはこゝにも来^き」、宣長や鈴屋門人らと親しく交歓し、研究を深めることができた。「此春、松坂より帰りて後は、誠に〜其事（引用者注、「てにをは」の問題）しれる道丸と生れ替りたり」（全一六・四一七）と記すほど松坂訪問は意義深いものであった。宣長もこの文に接し「誠ニ然リト信スル人、天下ニアリヤナシヤ、ヨシ知ル人ナク

トモ、道麻呂主一人己カ功ヲ知り玉ヘハ、己カ功ムナシカラズト、悦^じニタヘスナン」（同）と感激している。

この論文の目的はこうした宣長の遠隔教育の活動が道麿の例のように、対面教育と連携し、両者の相互作用のなかで実施されていたことを明らかにするものである。

第一章 鈴屋での教育活動と出遊講義

1 歌会

宣長は五年八か月にわたる京都遊学から郷里松坂に帰った宝暦七年（一七五七）、医師（小児科）を開業するが、翌年二月から松坂の和歌愛好会ともいべき嶺松院会に入会した。嶺松院会は月二回、定例日を決め歌会を開いている。この歌会と並行して明和元年（一七六四）からは遍照寺での歌会もはじめている。真淵への書簡による質疑がはじまったところである。この遍照寺和歌会は月に一回、開かれているから、嶺松院会と合わせ月ほばに三回、歌会に出席しほば終生、続くことになる。そのおびただしい歌の数々は『石上稿』（全一一五）『鈴屋集』（同）、『歌合評』（全一別二）などに記録されている。

宣長にとって歌会は憧憬する古代への思いや現在の自分の思いを吐露する機会となった。しかもここを母体に親しい知人・

門人らと交流しながら自分の思いを探りあてる機会でもあった。しかし、宣長はすでに京での遊学が終える頃から地下二条派の歌人・有賀長川の月次会に出席しているし、帰郷後も長川から通信による添削指導を受けていた。またその学識も豊かであった。このため、歌会では会員の詠草の批評・添削も求められる指導的な存在になっていた。

晩年の著作『うひ山ぶみ』（全一・一・三）では学問研究の領域として道を学ぶ学問、有職の学問、歴史の学問のほか「歌の学び」を四つ目の柱に挙げる。文献の読解だけではなく、和歌を詠むことは重要な学問として位置づけられていた。したがって、初心者が詠歌に親しめるように、初めから創作するのは困難であるから、まず模倣からはじめるなどの現実的な助言をしている――「詞のつゞきも、心のおもむきも、たゞふりたる跡によりてぞ、よみならふべきわざ也ける」（同・一三七『玉勝間』）。失敗作もあるからそれへの対処法も説いている（同・三四〇）。

また歌会の開催を地方の社中や門人にも勧めている。例えば名古屋の門人・河村正雄宛書簡（寛政三年・一七九一、十二月十五日付）では名古屋社中が歌会を開催しているか、質問している。すなわち「先達而之御詠草之残り、此度致『返巻』、近頃ハ御地社中之歌一向参り不申候、月次会ハいか、御座候哉」（全一・一七・一六五）と。名古屋は門人が多く社中としてまと

まり、宣長の添削指導も個人よりも社中に対して行なっていた。それだけに社中の月次会の動向を心配しているのである。

門人や歌会の会員たちとは和歌を楽しく学ぶ工夫もしていた。平安貴族のように歌合をすることもあった。『歌合評』（全一・別二）には天明三年（一七八三）頃から寛政十二年（一八〇〇）頃までの限定された期間ながら、二十二種類の歌合が残されている。また狂歌を楽しんだこともあった（九月十三夜狂歌集「全一・別二」）。さらに楽しく古学へと導く指導もあった。例えば「なぞなぞ」である。「松の木をきつて家をたつる」とは何か（「公家」）を解くような言葉遊びである（全一・別二・四五九）。この遊び心はさらにカルタにも広がっていた。宣長はみずから創作したカルタで門人たちと楽しみながら和歌を学んでいた。これは名勝地の札九十四枚と他の札六枚、合計百枚をよく混ぜて、参加者が交互に取りながら歌枕や枕詞などを理解しているか、得点を競い合うものである（「名勝地名箋式（詞苑名所加留多式）」全一・二〇）。

狂歌も「なぞなぞ」も会員が歌会と同様、対面の場に行なわなければならない。同じ空間と時間を共有しない遠隔教育ではできない。会員は当意即妙に知恵を出しあつて、平安貴族の思いを想像しながら、失笑や嘲笑を共有することができた。一味同心としての連帯感を深めることもできた。この共感の共鳴盤はフ

エイ・ス・トゥ・フェイスの「ライブ」でなければ経験できない。和歌の存在理由は心情の自然な発露にあった。『石上私淑言』（宝暦十三年成立か）で「歌といふ物は。人の聞てあはれとおもふ所が大事」、「きく人感^{アハレ}と思はざれば。こなたの心のぶる事すくなし」（全一・一一二）とする。互いの共感によって晴れたる思いが得られるとする。この共感のためにはもちろん、和歌の言語的表現や「文」（あや）などを学ぶ知的訓練が必要である。しかし、言語的技巧の訓練なら心情を言語化した短冊への添削でも可能であるけれども、「あはれ」という心情の共感には歌会のようなライブの場が必要であった。

尾形仿は俳諧の本質を「座の文学」であると指摘した。⁽³⁾歌会もたしかに対面の座でこそ心情の交流が活発に働く。通信による添削指導では時間と空間の「へだたり」があり詠歌の現場がわからないので、相互理解には限界がある。しかし生きた「座」ならば心情の交流が可能である。この生きた「座」では「宴会や陽気な気分」をも意味する、英語の「コンヴィヴィアリティ」convivialityが生じていたであろう。これは詠歌や書簡や文書の交換では不可能な経験である。

2 講釈と会説

嶺松院会の会員となった宝暦八年（一七五八）夏から、宣長

はこのメンバーを中核に自宅で夜間、『源氏物語』の講釈を始めた。この講釈に出席したのは九名、わずかなメンバーであった。『源氏物語』の講釈は『湖月抄』をテキストに二、六、十を定例日としてはじめた。宝暦九年三月からは『伊勢物語』、翌十年には『土左日記』、『枕草子』、『百人一首改観抄』などが加わることになる。宝暦十一年五月からは四の日の夕を式日としていた『枕草子』を中断し、代りに『万葉集』を読むことになる。このような初期の講釈の形態はテキストを代えながら継続し、ほぼ寛政七年（一七九五）まで続く。それ以降も『源氏物語』や『万葉集』の講釈があったけれども、和歌山などへの出講のため、鈴屋では休講がちとなる。しかし宝暦八年の開始より約四十年という長きにわたる対面教育が続いた。この経過は別掲の『年譜・教育と研究』の右側に縦の実線で示した（主に期間の長い講釈・会説のみを記載した）。

最初に取り上げた『源氏物語』は講釈を終えてもさらに二次、三次、四次と繰り返し、合計で四回に及んでいる。『万葉集』については三次、『古今集』は四次、『新古今集』は二次まで開いている。『伊勢物語』も初期と寛政期に二回、教材となる。しかもその期間は『年譜』のように数年をかける。その他、『神代紀』『百人一首』『職原抄』『史記』の講釈、二十一代集や『栄花物語』『狭衣物語』の会説などが実施された。

常時、複数のテキストの対面指導にあたっていたので、ひと月に多いときには十八ないし十九回も会合があったことになる。例えば講釈が順調に進んでいった明和年間には『源氏物語』と『万葉集』と『新古今集』とが並行して読み進められていた。『源氏物語』は月に八ないし九回、『万葉集』が三回、『新古今集』が三回、これに嶺松院歌会が二回、嶺松院の歌会が一回、松坂在住の須賀直見宅での歌会が一回。合計すると、会合は一日置き以上のペースで進んだ計算になる。

興味深いことに宣長はみずからの著述を講釈や会説に提供しなかった。唯一の例外は明和八年（一七七二）に書き上げた『直霊』を安永三年（一七七四）の十月から十一月まで式日を二・六・十の夜と定め、講釈しただけである。いうまでもなく『直霊』はやがて版本の『古事記伝』一の巻に「直毘霊」として収められる。宣長にとって古道の原理が示される著述である。門人名簿である『授業門人姓名録』（全一二〇）の記載は同じ安永三年から書きはじめられているから、自分の思想が確立したころ門人を明確に意識し、これを対象に『直霊』を短期間だけ講釈したことになる。

ところで宣長は対面教育を二種に分けていた。一つは講釈でありもう一つは会説である。宣長自身、京の堀景山のもとで素読の他に講釈と会説の学習方法を経験しているが、講釈と会説

は当時の一般的な方法であった。しかし、宣長はこの二つの指導法の長所・短所を指摘し、学習者の能力に応じた方法を採用すべきだと説く。

講釈は「うひまなびのともがらなどは、いさ、かもみづから考へうるちからはなきに、これもかれも聞えぬことがちなるを、ことごとくにとひ出むこともつ、ましくて、聞こえぬながらに、さてすぐしやるめれば、さるともがちななどのために」（全一・二四〇『玉勝間』）ふさわしい。ただし講釈は拝聴するのではなく、下読みと読み直し、予習と復習の必要も説く。「聞き書き」についても初めから一言も聞き漏らすまいと筆を執ることを批判する。「もはら聞書のためのこうさくになるたぐひもおほかるは、いとくあぢきなきならひになん有ける」（同二四一）。

これに対して会説は「おのくみづからかむかへ、思ひえたるさまをも、いひこゝろみ、心得がたきふしをば、とひき、かへさひもして、かたみにあげつらひ、さだむるわざ」（同二四〇）である。したがって会説は初学者向きではない。

学習者の能力の高低によって会説と講釈とを分けていた。宣長は儒者が講釈よりも会説を選ぶことには批判的である（同二四〇）。学習者の適性と指導法とを考慮して会説と講釈を決められるべきだ、と考えていた。

〔年譜〕に見られるように、鈴屋では講釈が多い。しかし明和元年（一七六四）五月に『後撰集』から始まり安永元年（一七七二）一月に『新続古今集』に終わった二十一代集は会読である。安永元年からはじまった『栄花物語』や『狭衣物語』も会読である。安永四年十月二十四日から始められた第二次の『万葉集』の授業は講釈ではなく会読である。第三次は講釈にもどる。安永年間に入ると、松坂門人の能力が向上したことを意味しているのであろう。

ところで、講釈と会読との選択基準で見落としてはならないのは「問う能力」である。引用したように初学者は「とひ出むこともつゝましく」、会読にふさわしい者は「とひきゝ、かへさひもして、かたみにあげつら」うことを指摘しているからである。宣長は講義を聞いたり文献を読んだりする「読む能力」や文章を書いたり詠草を詠んだりする「書く能力」を強調するだけでない。「問う能力」をも重視していた。⁴入門こそしなかったが親交のあった伊勢神宮の神官・荒木田（中川）経雅に書簡でも、「御不審御座候ハハ、幾度も可被仰下候、ケ様之事ハとかく数へん往復仕り候へは、段々よき考へ出申候物ニ御坐候へハ、無御遠慮いく度も可被仰下候」（全一七・六五）と認めている。

しかも「学者のまづかたきふしをとふ事」（全一・一四六

『玉勝間』では、だれも解けないようなむずかしい質問をしがちであることを戒め、まず易しいことから幾度も繰り返し質問すべきだ、と論じている。「よく聞こえたりと思ひて、心もとめぬことに、思ひの外なるひがこゝろえの多かる物」（同）と書く。これは鈴屋での対面教育の経験だけではなく、遠隔教育で能力も境遇も異なる多彩な門人からの多数の問目に接した経験からも生まれたと思われる。師にむずかしい問いを出すことで自分の能力が高いかのごとく思ってもらうのではなく、易しい問いから始めることを主張した。

3 出遊講義

以上は松坂を中心とした対面教育であるけれども、門人が多く社中を形成しているような地域では宣長を招聘し、直接、宣長の講義を聞いたり歌会を開いたりしていた。「コンヴィヴィアリティ」は松坂社中だけが独占することではなかった。

最初の出遊講義は寛政元年（一七八九）三月、門人の要請で名古屋に出講、一週間足らず、当地に宿泊している。この年、還暦を迎えたが名古屋の門人たちはこれを祝う会を催している。この時、河村正雄ら少なくとも十二名が入門している。『授業門人姓名録』（全二〇）によれば、この年の尾張国からの入門者の合計はで二十一名に達する。全国では〔年譜〕に示

したように三十七名である。〔年譜〕のように入門者数は寛政期に入ると、全国各地からの門人数が増加している。とりわけ宣長自身が出遊講義などで訪問・逗留した年が多いことがわかる。

第二回目は四年三月、同じ名古屋に赴き、二週間程度、歌会を開き、門人の詠草への添削指導にあたる。講釈という形態ではないが、『古今集』、『万葉集』、『源氏物語』などについて語った。第三回目は五年三月に上京している。『寛政五年上京日記』（全一―一六）によれば、主に門人・沢真風宅に止宿して講釈や歌会を開いている。講釈は二十―四十五人程度が聞いている。また、妙法院宮に拝謁したり公家の芝山持豊、肥後の長瀬真幸、彦根家中、土佐家中、堺町人らと会ったりしている。この京都では少なくとも九人が入門している。帰路、彦根、大垣、名古屋、津などの門人宅に立ち寄り、歌会を開いている。第四回目の出遊講義は寛政六年三月の名古屋である。名古屋訪問は四回目でこれが最後となる。『日記』には「逗留中、昼夜講尺」（同四五六）とある。

第五回目は同年十月、紀州侯の召しにより和歌山へ赴いている。ここで『中臣祓』などの御前講義を行うとともに、多数の藩士らに『大祓詞』や『源氏物語』などを講釈をしている。和歌山の滞在は六十日余りにわたる。帰路、大坂や京に回り、門

人や知人、新たな入門者と会う。第六回目は寛政十一年正月、召しにより再び、和歌山に出かけて『源氏物語』、『万葉集』、『古今集』などの講釈を行っている。第七回目も和歌山に登城し翌年十一月から享和元年（一八〇一）二月まで長期にわたって講釈などを行っている。大坂や奈良を経て三月一日に松坂に帰宅する。

休むまもなく、同年同月二十八日に京に向け松坂を立つことになる。最後の八回目の出遊講義である。四月から約三か月、堂上・地下の歌人やその門人たちと面談し講釈をしている。ここで五名が入門したが、京以外の出身者を含めると十一名が入門している。上京が与える影響力が大きかったことがわかる。六月に帰宅するも、この年、宣長は七十二歳。強行軍のせいか、同年、九月二十九日に亡くなる。

二章 研究・著述活動

以上のように、宣長は生涯にわたって講義を続けたが、同時に往復書簡による遠隔教育も継続していた。

『授業門人姓名録』（全一―二〇）を作成し門人を自覚するのが安永三年（一七七四）、安永六―八年には門人らとの書簡上の質疑応答の記録である『答問録』（全一―）を整えている。

1785	天明5	『鉗狂人』『玉くしげ』巻21 7名						
86	6	6名			10月終業 再々開			
87	7	『玉矛百首』刊行 24名				1月		
88	8	巻22～24 19名	5月終業後 再々開		三次 万葉集			〔出遊講義先〕
89	寛政元	『神代正語』巻25～26 37名『玉勝間』稿始			10月から 講釈	二次 新古今集		〔名古屋〕
1790	2	巻27～28 20名『古事記伝』初帙刊						
91	3	『新古今集美濃の家つと』 13名巻29～30	四次 源氏物語			10月	10月 伊勢物語	
92	4	『玉あられ』刊行巻31～33 37名				10月	9月	〔名古屋〕
93	寛政5	『古今集遠鏡』巻34中巻終了 43名巻35				四次 古今集		〔京都〕
94	6	和歌山城で御前講義 38名						〔名古屋／和歌山〕
1795	7	巻36～37 21名	4月	6月		5月		
96	8	『源氏物語玉の小櫛』巻38～40 24名						
97	9	巻41～43 17名						
98	寛政10	『うひ山ぶみ』巻44完成 21名						
99	11	規約通達 23名						〔和歌山〕
1800	12							〔和歌山〕
1801	享和元	24名 死去 23名						〔和歌山京都〕

天明期には伊勢国以外からの門人も増え、鈴屋の収入面にも反映する。北原進の分析によれば、寛政期に入ると家業経営に占める「医療経営」が「学校経営」収入と逆転する（全一・一九・五二～六六。『金銀入帳』などの経営帳簿に関する「解題」）。ここで北原が「学校経営」に含めるのは門人料（授業料）、謝金、書籍代である。門人は盆暮れに添削や認め物などに対する謝金を支払っていた。この「学校経営」は寛政三年（一七九一）ごろまでは全体の十九％にすぎなかったけれども、「医療経営」収入と反比例し、寛政五、八、十一年にはそれぞれ四十七％、五十一％、五十二％と増加していく。本居宣長の名は全国に知られ門人が増え、寛政十一年七月には鈴屋の規約を通過している（全一別三・六三〇）。

このように、宣長は松坂での歌会、講義、出遊講義などの対面教育と連動させながら遠隔教育を生涯、続けていた。亡くなる享和元年（一八〇一）九月、逝去の十八日前に堀口光重に詠草の添削を送る（全一・一七・五五四）。四日前の、植松有信宛書簡には「逆も添削難」及候」と認め、さらにこの「及」を「叶」と改めている。死の直前まで文章に慎重である（同五五五）。まさに「人に誨えて倦まず」である。

そのために「学んで厭はず」の精神で研究も続けられている。遠隔教育や対面教育の裏付けともなる研究である。

1 秀歌の選定

研究活動は嶺松院歌会に入会した宝暦八年（一七五八）一月、『古今選』（全一・一四）の著述に遡る。歌会が詠歌の創作活動であるのに対して、この著述は二十一代集などから秀歌を分析し選定する作業である。秀歌選集はすでに世評の高い出版物もあるのにこの作業に着手した宣長の動機やその意義について岩田隆は「つぶさに和歌史の変遷をたどるとともに、佳しと信じた秀歌を選んで、作歌の範例としよう」と、そう考えたのであろう⁽⁵⁾と書く。遊学時代はもちろん、それ以前から和歌への関心を深めてきた宣長があらためて先行研究を点検し、これを批判的に吟味したのである。

選歌はさらに『草庵集玉箒』（明和四年・一七六七、五年頃）や『万葉集玉の小琴』（安永八年・一七七九）の著述に至る。前者は真淵から注釈する価値もない（全一別三・三九四）と批判されたのに、明和五年と天明六年（一七八六）に公刊している。

2 問答と論争

宝暦八年、『安波礼弁 紫文訳解』（全一・四）を書く。いずれも「あはれ」などの語句の用例を分析、自分の言葉で解釈し直

し先行研究を批判していく。同時期の『排蘆小船（あしわけをぶね）』（全―二）は「蘆」を「悪し」の隠喩とし、先行する和歌を選別しようとの意気込みが表れている。特に「安波礼弁」では「或人、予ニ問テ曰ク」として、藤原俊成の和歌「恋セスハ、人ハ心モ無ラマシ、物ノアハレモ是ヨリゾシル」（全―四・五八五）を引き、人の情のあるなしはただ「もののあはれ」を知るか知らぬか程度のことなのか、と問う。この問いを探索する過程から「もののあはれ」こそ神代より未来にわたって通ずる和歌の神髄であると発見する。直観は記紀や『伊勢物語』などの用例に関する実証的研究によって立証される。

「もののあはれ」の探求はさらに、『源氏物語』の実証的研究にも向けられる。宝暦十三年（一七六三）、『紫文要領』で「大よそ此物語五十四帖は物のあはれをしようといふ一言にてつきぬへし」（全―四・五七）と断言する。同じ頃『石上私淑言』（全―三）でも同じ論点を明確に主張する。いずれも結論までの論証はきわめて分析的で、主情的ではない。宣長は『源氏物語』から多数の用例を挙げ、アモラルな言語分析に徹する。『源氏物語』を仁義五常の道に従って勧善懲悪の物語とする儒教の通説や盛物必衰の理を説くという仏教の通説を批判し、「戒戒の心をはなれて見るへし」（全―四・三八）と主張する。自宅で親しい仲間に『源氏物語』の講釈をはじめて五年目のこ

とであるが、その講釈や講釈のための研究活動が著述として実ったのである。

この著述と講釈との関係は著述の文体にも表れている。前述のとおり、「安波礼弁」は「或人、予ニ問テ曰ク」と問いを立ててこれに答える問答体である。また『紫文要領』も『石上私淑言』も問答体である。この質疑応答の著述は宣長が門人たちに講義している時期と重なる。しかも宣長の一方的な回答や弁論ではない。宣長が京都で解説してきた『論語』などの儒学の教材とは異なる。そこでは門人が師に「仁とはなにか」「礼とはなにか」と問い、師の説を承る形式で終わる。これに対して宣長の問答体は師の回答で決着しない。質問者は回答に対して反論し、この反論に対して回答や弁論が展開されている。質問者は答えに對し「しからは右にいふごとくならば」と問いを敷衍したり反論を挙げたり説明の食い違いを質したりしている。つまり、著者・宣長は回答への反論を予想して、これに反駁する構成の論文を書いている。

晩年まで講釈や会話を重ねていたから、文字どおり門人からの質問に答える機会も多かったはずである。同じ空間と時間を共有する場で講義する相手がいたことは、相手の表情や言動などから聞く人間の反応を感じするよい機会になった。また、安永期にまとめられた先の『答問録』からは各地の門人の質問・

疑問への回答に迫られ、教育と研究を重ねていたことがわかる。宣長はこうした門人の質疑や反応に応じて自分の思考指導を続けた。思考は自分の頭脳の内部でいわば秘かに続けられるが、その成果を相手を意識して話したり書簡の文章で答えたりすることは、自分の思考指導を外部へと広げることができる。

この思考指導はさらに公開の場で展開される。宣長はその温厚な人柄からは推測しにくい論争家でもある。事柄の真偽・是非は論争相手の人柄や相手との間柄に関係なく、公けに議論すべきだと考えていた。「師の説になづまざる事」(全一・八七)である。例えば「道云事之論」への批判書・『末賀乃比礼』があるのを知ると、安永九年(一七八〇)、『くず花』(全一八)で反駁する。薬草・葛花を飲んで漢意から目を覚ませ、というタイトル自体が論争的である。藤貞幹の『衝口発』が日本の古代の文物などが中国に由来するとの論に接すれば、天明五年(一七八五)、『鉗狂人』(全一八)を書く。相手を「狂人」とみなし、これに首かせをかけるというタイトルである。このタイトルのように宣長はレトリックを駆使して反駁する。さらに天明六、七年頃には上田秋成と古代の音韻などについて書簡で論争を展開する(全一八『呵刈度』)。

この論争の背景には、宣長が常に対面教育や遠隔教育の場で能力も境遇も異なる門人から多種多様な問いにさらされていた

事情がある。論争のきっかけも相手から仕掛けられたというより、門人からの報告や告発に端を発するものであった。

3 臨床の場

さて、『紫文要領』や『石上私淑言』など「もののあはれを知る」という主張はしばしば「女童」や「児女子」の現実で例証する。『紫文要領』には「源氏君をはじめとして、其外のよき人とても、みな其心はへ女童のことくにて、何事にも心よはくみれんにして、男らしくきつとしたる事はなく、た、物はかなくしとけなくおろかなる事おほし」(全一四・九四)とある。『排蘆小船』や『石上私淑言』でも武士や儒者の建前を批判して、人間の真情は弱く哀しく愚かであることを「児女子」で例証する。

ここにもすでに指摘した著述と講義との関係に似た、著述と臨床との相互作用がある。宣長は当時、春庵と号する医師、専門は小児科であった。小児科は「唾科」とよばれていたように、患者となる乳幼児は自分の病状や意思を言語化しにくい。しかも生死の危機に直面しやすい。その病状を訴える母親の訴えは感情的であつたろう。宣長が接した臨床の場にはこのような弱い子どもと母親とが多かった。もちろん患者は母子にかぎらず近隣の町人も多数を占めていた。しかしいずれも病床にあり、

宣長は「もののはれを知る」現実にも身を置いていた。専門用語を最小限にし、わかりやすい言葉かけと暖かい対話（「ムンテラ」）をしていたであろう。対話にもならず、微笑みや哀しみの表情で接するしかない現実もあった。この臨床も講釈・会談の場面とともに、宣長の著述を支えていた。

4 研究成果・学習指導書の公刊

このような教育と研究・著述活動、診療と著述・研究活動、要するに経験と言語との往復運動のなかから宣長の研究は深化していく。中核は『古事記伝』（全一九・一二）の執筆である。その期間は明和四年（一七六七）、巻二（版本巻三）草稿本を脱稿してから寛政十年（一七九八）に巻四十四が完成するまで三十二年を要した。時に六十九歳である。この時、荒木田久老宛に「命ノ程を危ク存候処、皇神之御めぐみにかゝり、先存命仕候」（全一・一七・四二二）と認めたように、命を削って完成させた。浄書は中断もあったものの堅実であった。その進捗は〔年譜〕に浄書時期が確定されている版本の巻数で示した。もちろんこの浄書の前には草稿の執筆がある。浄書が完成しても、その前後には出版のための作業が並行して進められていく。浄書と刊行とが繰り返されていく難所を何度も越えなければならぬ。こうして寛政二年に巻一から巻五までの初帙五冊が刊行

される。

『古事記伝』の執筆や公刊にあたっては宣長と交流のあるさまざまな人物とのネットワークが生かされていた。すでに賀茂真淵からは本人の書き入れがある『仮名古事記』を借覧している。また、同郷の谷川士清とは書簡の交流や書物の借覧があったが、『古事記伝』の稿本・巻五（版本巻六）も明和八年十二月十日付で送付し助言を仰いでいる（全一・一七・四五）。さらに、版下を書くには門人・栗田土満らの協力があったし、門人の版木師・植松有信の彫刻も欠かせなかった。

著述とその公刊は『古事記伝』に限らない。晩年、『うひ山ぶみ』で初学者に勧めた自著は『直霊』『くず花』『玉くしげ』『玉矛百首』『神代正語』の五点である。その他、版本だけでも約五十冊に及ぶが、その半数は生前に出版されている。公刊は宣長にとっては事柄の是非を公開の議論にさらす目的があったけれども、門人たちには自学自習用の教材となった。特に宣長の講義を聞くことができず、書写もままならぬ地方の門人には書籍は欠かせなかった。門人たちは師の書籍の購入を求めたし宣長も自著を紹介している。

例えば、信濃国上田の伊藤忠司は寛政五年（一七九三）正月、学問の方法を書簡で質問した。正式入門もししていない（『授業門人姓名録』に記載がない。来訪し入金はしている）。しかし

到着した翌日、十四日付で宣長は返事を書いている。皇朝学には記紀や万葉集が第一であるが、自著では『古事記伝』などがあるとして、これらは「板行いたし、京二も江戸二も書林二有之候」(全一七・一九五)と紹介している。また甲斐国の萩原元克は書籍の購入が困難なので『国号考』の代金として金百正を預けていた。宣長は確かに落手したこと、「残りは預り置申候」(天明八年八月十八日付、全一七・一一一)と書き送っている。寛政四年六月十日付の同人宛書簡では予め預かっていた代金から出版したばかりの『古事記伝』第二帙と『玉あられ』を送っている(同一七九)。宣長自身、門人の便宜を考え、出版の予告をしていたことがうかがえる。もともと本の注文を受け送付するのは「煩勞」ゆえ、京でも江戸でも名古屋でも購入できるので書林から直接取り寄せてほしいという返信(寛政九年十二月十八日付、同四〇二)もある。懇切にも書林には住所も添えてある。「文通便り不自由ニ而こまり申候」(同一二一)という文面もあるので、書籍が入手しやすい方法を師弟ともども工夫していた様子がわかる。

テキストを入手しても自学自習を進めるにはスタディ・ガイドも欠かせない。宣長はこの学習指導書の著述や公判をしている。自宅で松坂商人に教えはじめた頃、古文読解用の手引き書『古言指南』を著していた。商人の読み書き能力に対応するた

めである。同じ趣旨で注釈書として刊行されたものに、口語訳を付けた『古今集遠鏡』(寛政九年刊)、『源氏物語玉の小櫛』(寛政十一年刊)、『万葉集玉の小琴』(安永八年成立。没後出版)などがある。前述の『神代正語』も門人・横井千秋から古事記の上巻を古語のまま仮名書きにしてほしいと請われ著したものである。詠歌や論説を書くときに必要な文法書として『玉あられ』も寛政四年(一七九二)に出版している。この『玉あられ』については門人が活用せず歌文に誤りをおかすことを「いかなるひがことぞや」(全一・一九九『玉勝間』)と叱っている。

晩年に書かれた入門書『うひ山ぶみ』(寛政十一年刊)は初学者を意識しきめ細かな助言をしている。例えば、読む能力の向上のために、初めから書物を読み通すのは容易ではないので、まずは短い著作からはじめよ、いちいち全部理解しようとせずむずかしい箇所は後回しでよいと助言している。能力も境遇も異なるさまざまな門人を対面教育と書簡の交流による遠隔教育などで指導してきた、宣長らしい指摘である。

第三章 遊学者と来訪者

1 文通困難

鈴屋は通常、私塾(学問塾)に分類されているが、遠隔教育

や近隣門人向けの対面教育が中核なので校舎・教室・寄宿舎などはなかった。宣長は寛政六年（二七九四）、初御目見の際、松坂の医師・塩崎宋恕と連名で紀州藩に学問所の建設を願っている（『学問所建設願書下書』全一別二）けれども、実現しなかった。

したがって地方の多くの学習者は遠隔学習を選んだ。しかし、宣長が著した著述や学習指導書から学べるといっても現実問題として購入には時間もかかるし、書写する機会もほとんどない。書簡による遠隔学習が可能といっても、もともと飛脚の往来にはさまざまな壁があった。たしかに松坂は「諸国のたよりよし」（中略）いづこへもくたよりよし」（全一一・四四五『玉勝間』）とある。伊勢神宮へと至る街道沿いにある商業都市であったから、飛脚の往来が活発であった。しかし実際には松坂から遠く、飛脚もままなぬ地域に住む学習者もいた。宣長自身、土佐の門人・宮地春樹宛に「愚老著述ノ書共、彼是人御覽度物共多く御座候へ共、千里をへたて往来不便故不能、残懷奉存候」（全一一七・九〇）と書く。

本人に届くまでの経路も複雑だった。『文通諸子居住処并転達所姓名所書一／二』（全一一〇・三二五～三三四）をみると、松坂からいったん大坂や京や名古屋などに送られ、そこから各地に転達される経路が多い。例えば、伊予八幡浜に住む門人・

野井安定宛の上書は次のとおりである。

「大坂土佐堀壱丁目田辺屋橋／伊予屋六兵衛様迄／本居中衛／伊予国八幡浜／野井七郎兵衛様行／書状具内／末光清三郎様迄／大坂迄ちん済／封／自伊世松坂」（全一一七・三七四。／は改行を示す）。

つまりまず「大坂土佐堀壱丁目田辺屋橋／伊予屋六兵衛」にいったん届けられ、ここから伊予の末光清三郎に配達され、やっと本人に届けられる。宣長とは別人の筆で「伊世（伊勢）松坂」より大坂まで飛脚賃は済んでいるとある。

中継ぎを経るので配達されない事故もあった。例えば、肥後熊本藩士という身分の長瀬真幸宛でも手際よく伝達されなかった。宣長は二度三度、京の宛て先に書状を差し出しているが届いているのかおぼつかない、毎度毎度、遅延するようなので早く確実に届くような方便を考えてほしい（寛政十年十一月十七日夜付同人宛書簡。全一一七・四三八）と書く。約三か月も要して届いた書状に「とかく文通早速二相達し不申候」、「雲山を隔候事」（同）と嘆息している。

2 遊学者

こうした飛脚便の事情もあって、宣長に関心を寄せる者のなかには直接、松坂を訪問する人がいた。仮にこの人びとを遊学

者と来訪者とに分けよう。ここで遊学者とよぶのは地方から松坂を訪ね一定期間、鈴屋の講義に出席した門人である。来訪者とよぶのは一時的に来訪し、宣長と短時間、面談したり飛び入りで講義に出席したりした人である。

遊学者のなかでは石見国浜田藩の藩医・小篠敏は安永五年（一七七六）に訪問以来、安永九年に藩命で入門し、以後、数か月から一年にわたる長期滞在を三回も重ねている。書簡の交流も多い。その他、備中の藤井高尚、妻子を伴って熊本から訪ね逗留した熊本の帆足長秋、同じ熊本の長瀬真幸、尾張の加藤磯足・植松有信、彦根の小原君雄らが認められる。ここでは熱心な遊学者を二人、あげよう。

出雲国造家の千家俊信（一七六四―一八三一）は寛政四年（一七九二）、二十九歳で入門して以来、三回、遊学している。第一回は寛政七年九月から翌年一月にかけての約四か月である。宣長はその前年、六月三日付書簡で滞在費用について宿賃は「一日銀式匁五分或ハ式匁ぐらひニ御座候」、粗末な宿でもよいなら「銀壹匁五分位ツ、ニ而も、御宿申候方可有之候」（全一七・二二八）と書き送っている。この比較的長い期間の遊学にもかかわらず、俊信は帰国早々、宣長に問目を送った。宣長は多忙で「とても御尋事等あまり数々長く候而ハ、一々御返事も成かたく候」（同二六四）と閉口している。しかしそれ

だけ俊信は研究熱心であった。翌寛政八年に第二回目、寛政十年には第三回目の滞在をしている。さらに享和元年、宣長が上京するおりにその旨を俊信に知らせ京で会いたい、「呉々奉待候」（全一七・五三五）と書き送ると、出雲から京を訪れ宣長の一行に加わっている。宣長自身、面談を求めていたのである。

もう一人は遠江国の石塚龍磨である。遠州は門人が十九名もいたが、『古事記伝』の版下を作成した栗田土満、鈴木書緒、高林方朗、金原清方らが遊学している。なかでも龍磨は宣長から添削指導を受けて著した『古言清濁考』の評価が高く、『玉勝間』で古学を学ぶ者の必読書とされる（全一・一四四）。龍磨が初めて宣長を訪ねたのは天明七年（一七八七）八月である。二年後の寛政元年、二十六歳の時に「金式分持参」して正式入門を果たしている（全一・二〇・二六四『雅用録』）。同じ時期、遠江の高林方朗、山下正彦、小国重年も松坂を訪ね入門し、共に第二次の『万葉集』会読に出席している。さらに寛政十一年（一七九九）、三度目の訪問、この時の年始開講の廻状には松坂の門人たちとともに「石塚安右衛門様」の名がある（全一・七・四四八）。平素の講義に逗留中の遊学者も招待されたのである。四回目は享和元年二月に遠江の高林方朗ら五人との訪問である。ここで宣長が上京すると聞き及ぶと、いったん帰国し

た後、四月十三日に入京し宣長に随行する。時間の許すかぎり宣長のもとで直接、学びたかったことがわかる。しかも龍磨は三か月にわたる京での活動を『鈴屋大人都日記』（全一別三）として残している。

3 来訪者

宣長は短い時間、面談した程度の来訪者についても複数の記録を残している。とくに『来訪諸子姓名住国并聞名諸子』（全一―二〇）などからは天明元年（一七八一）以降、亡くなる亨和元年（一八〇一）まで年次ごとの来訪者がわかる。この二十一年間に一七六名が確認できるが、天明と亨和に挟まれた寛政期、十二年間には一四八名もいる。寛政元年に十六名、四年に二十名、十二年に二十一名などである。伊勢国以外の人でも平均十二名程度、月に一人程度の来訪者があったことになる。寛政期は入門者も多くなっているのが、宣長は寛政期になって全国的に知られるようになったことがわかる。

階層別では町人・農民などの庶民が半数を占める。これは門人の割合、五割弱とほぼ一致する。次に多いのは神職三十六名、武士三十一名、医師九名、僧侶九名などである。僧侶には批判的な宣長であるが、『本願寺宗』『天台宗』『禅僧』などの人物が訪問している。

国別では、江戸（三〇名）、遠江（一四名）、陸奥（一三名）、肥後（一三名）、尾張（七名）、甲斐（七名）、石見（七名）、肥前（六名）、近江（六名）、駿河（六名）、信濃（五名）などである。

江戸は県居派の膝元であるから門人は四名しかいないけれども、来訪者は三十名と多い。人口が多く情報量なども豊富なので宣長を知る機会も多く関心もち、伊勢参りなどの折りに鈴屋を訪問している。蒲生君平、浮世絵師・窪俊満のほか旗本、藩医、狂歌師、書家など多彩な人物が記録されている。寛政七年（一七九五）三月には出版元の蔦屋重三郎も来訪している（全一―二〇・二六九『雅事要録』）。『千蔭春海ナトコンイノ書林也』（同）とも添えられ、蔦屋が江戸派の橘千蔭や村田春海と宣長とをつなぐ役回りを演じていたことをうかがわせる。かれは寛政三年、筆禍事件を起こしていたが、宣長と会った七年十月、刊行された『玉勝間』の文言が適切ではないと宣長に助言している。孟子などへの宣長の指弾が問題を起こしそうなためである。宣長もこれに同意し彫替えを版元に指示している⁽⁶⁾。

遠方の陸奥からの来訪者も十三名と多い。最北端の松前藩からの来訪者もいる。藩士・下国武である。『来訪諸子姓名住国并聞名諸子』の寛政十一年の項に「五月十七日来ル」とある（全一―二〇・二五三）。『授業門人姓名録』にも十七日付の記載

がある(同・二二〇)から、同日、入門した。遠く松前藩からはるばる訪ねた人物に宣長は感激したようで、同月二十五日付書簡で福岡藩士・青柳種信に報告している。「東ハ奥ノ松前迄も行渡り申候而、先頃松前住居家中ノ士も致^ニ入門^一申候、下国武^ヲと申候而、厚志ニ御坐候」(全一七・四五九)と。その三日後の二十八日、下国武は伊勢参りの帰り、再び宣長を訪ねる。すると宣長はさつそく近所に住む愛弟子・大平を呼び出している。「此間之松前人、只今又見え候処、貴公の御事も被^レ尋候、只今御手すきに御座候ハハ、此方へ御出候而御咄シ被^レ成間敷や、ちよと御知らせ申候。もし御出ならハ只今御出可^レ被^レ成候、以上」(全一別三・五八六)。

南の九州からも合計で三十名弱が訪問している。例えば、肥後は門人が九名いるが、来訪者も多く十三人、確認できる。肥前(長崎や唐津)からも寛政四年以降、六人が訪問。日向延岡からは寛政九年二月、「京師留学儒者ミナ川弟子」と添え書きのある白瀬秀治が訪ねている(全一二〇・二五二)。海を越えて対馬からの訪問客も一人、高井宇吉郎がいる。寛政四年九月三日の記載である(同二五〇)。なお二人とも入門はしていない。

松坂に近いから来訪するわけではない。遠隔地の陸奥や肥後などからの来訪者がいるのは、距離よりも宣長への関心の強さ

を反映しているためだろう。街道の便が悪い甲斐や信濃からの来訪者がいるのもその証左であろう。

おわりに

遠隔教育と対面教育との連携は現代的な教育問題である。地球的規模で発達したインターネットが可能にしたデジタル・コミュニケーションは従来、分離されてきた文字メディア、音声メディア、映像メディアなどを融合するメディアを出現させた。この結果、印刷メディア中心、また放送メディアによる補完によって進展してきた従来の通信教育は限りなく対面教育に近づいてきた。教室での相互交流や教室での実習・実技の指導もeラーニングによって可能になってきた。近年、通信制の大学・大学院で面接授業なしで卒業が可能になった制度改革の背景にはこうした多メディアの急速な発達がある。

しかし、インターネットや通信衛星などによる遠隔教育が進展すればするほど、対面教育の意義が見直されてきた。OEC Dはデュアル・システムを、アメリカでは「ブレンデッド」とよんで、遠隔教育と対面教育との連携や融合が模索されている。⁽⁷⁾

この意味で本居宣長が鈴屋で教育と研究とを連動させつつ、対面教育と遠隔教育との連携を図って指導してきたことは、連

携・融合の原型となりうる。

注

(1) 以下、本居宣長の著作からの引用は『本居宣長全集』全二〇巻・別巻全三巻 筑摩書房 一九六八～一九九三年による。引用は引用文の後に「全―・四九」のように略記した。これは同全集の第一巻四九頁を意味する。「全―別三」は全集の別巻三を表す。なお必要に応じ書名も添えた。旧字体は原則として新字体に改めた。また、宣長の著作の刊行年、門人の表記などは基本的に本居宣長記念館編『本居宣長事典』東京堂出版 二〇〇一年、に従った。

(2) 詳細は次の三点による。

白石克己「日本における遠隔教育の起源―鈴屋の意義」(『鈴屋学会報』第一六号 一九九九年 一五～二八頁)。同「本居宣長の自立学習論―門人との書簡の交流をととして」(『研究助成報告書論文集第一〇集』上廣倫理財団 二〇〇〇年 二五～四四頁)。同「本居宣長にみる『遠隔教育』の視点―『へだたり』・『やりとり』・『つながり』」(田中克佳編『「教育」を問う教育学―教育への視点とアプローチ―慶應義塾大学出版会 二〇〇六年

(3) 尾形仿『座の文学―連衆心と俳諧の成立』講談社学術文庫 一九九七年

(4) 私は通信教育などで自立学習を進めていくには「読む能力」「書く能力」のほか「問う能力」が欠かせないことを指摘した。『「読む・書く・問う」能力の向上―通信教育の現場から―』(教育哲学会編『教育哲学研究』第八三号 二〇〇一年 一二

一七頁)

(5) 岩田隆『本居宣長の生涯―その学の軌跡』以文社 一九九九年 六七頁

(6) 杉戸清彬編『初版本玉がつま三の巻』和泉書院 二〇〇三年 七三～八三頁

(7) OECD／香取一昭訳『ラーニング革命―ITと情報技術によって変わる高等教育』エルコ 二〇〇〇年。白石克己・廣瀬敏夫・金藤ふゆ子編著『ITで広がる学びの世界』ぎょうせい 二〇〇一年

参考文献

海原徹『近世私塾の研究』思文閣出版 一九八三年

大野晋『日本語と世界』講談社学術文庫 一九八九年

岡中正行・鈴木淳・中村一基『本居宣長と鈴屋社中―「授業門人

姓名録」の総合的研究―』錦正社 一九八四年

木代修一『日本文化の周辺』明治書院 一九六三年

辻本雅史・沖田行司編『教育社会史(新体系日本史二六)』山川出

版社 二〇〇二年

本山幸彦『本居宣長』清水書院 一九七八年

山中芳和『近世の国学と教育』多賀出版 一九九八年